

上に, BALB/c 系統に由来するがん感受性遺伝子座の存在を, また5番染色体上には BALB/c 系統に由来する, がん抵抗性遺伝子座の存在がそれぞれ示唆された. この可能性を確認するため, 各遺伝子座領域のコンジェニックマウスを作製し, 再度同様に照射実験を行ったところ, 4番染色体 (D4 Mit12/338) に関する解析において, C/M パターンのマウス平均生存期間は  $246 \pm 10$  日, M/M パターンのマウス平均生存期間は  $275 \pm 7$  日となり, 両者間に有意な差 ( $\chi^2 = 8.89$ ,  $p = 0.0029$ ) が認められ, この遺伝子座に BALB/C 系統に由来するがん感受性遺伝子の存在が確認された. コンジェニックマウスを用いた2番染色体, 5番染色体の, がん感受性・抵抗性遺伝子座については, 現在解析検討中である.

#### 4 Gastric carcinoma with lymphoid stroma (GCLS) の検討

橋立 英樹・渡辺 英伸 (新潟大学)  
味岡 洋一・西倉 健 (第一病理)  
安保 徹・渡部 久実  
宮川 亮子・内藤 哲也 (同 医動物)  
菅原 聡・良田 裕平 (同 第三内科)  
相場 恒男

【目的】胃癌において, 癌巣周囲に強いリンパ球浸潤を伴うタイプの癌があり, (Gastric) Adenocarcinoma with lymphoid stroma (GCLS) と呼ばれ, 通常の胃癌に対して予後が良好であり, さらに Epstein-Barr virus (EBV) が関与することが知られている.

【目的】GCLS の浸潤リンパ球の特性および EBV 感染との関係を調べる.

【材料・方法】GCLS 外科切除固定材料28症例について, 免疫組織化学にて GCLS の粘液形質を, In situ hybridization 法にて EBV RNA を, 新鮮材料が入手可能であった5例については Flowcytometry にて腫瘍浸潤リンパ球をそれぞれ分析した.

【結果】1) GCLS ではほとんどの症例 (93%) で EBER-1 が陽性であった. 2) GCLS は多くの症例 (89%) で胃型粘液形質を示した. 3) GCLS の TIL は末梢血に比べて NK cell が少な

く, CD8 + T cell が多い傾向があった.

## II. 特 別 講 演

### 「免疫系の標的細胞傷害機序」

順天堂大学医学部免疫学

八木田 秀 雄

## 第61回新潟癌治療研究会

日 時 平成13年 7 月28日 (土)  
午後 1 時40分 ~ 5 時40分  
会 場 新潟東映ホテル 1 F  
白鳥の間

## I. 一 般 演 題

### 1 遠隔転移をきたした頭頸部扁平上皮癌10例の臨床病理学的検討

長島 克弘・星名 秀行  
高木 律男・永田 昌毅  
藤田 一・宮本 猛  
相馬 陽・関 雪絵 (新潟大学大学院  
医歯学総合研究科  
顎顔面口腔外科)

悪性腫瘍の転移は, 予後を左右する重要な因子である. 特に遠隔転移を生じた場合には, 患者の生命予後は絶望的となることが多い. このような遠隔転移の可能性を未然に予測し対応することができれば, 予後の向上が期待できる. そこで, 口腔癌の原発巣および頸部リンパ節が制御されているにもかかわらず, 数か月後に遠隔転移が確認された症例を対象に, 臨床病理学的に検討を加えた. 対象症例: CT の日常稼働, CDDP 多剤化学療法を導入した 1984 年以降の頭頸部扁平上皮癌 193 例中の10例である. 検討項目: 原発部位, TNM

分類, Stage 分類, 組織学的分化度, 癌浸潤様式(Y-K), 化学療法, 一次治療, 頸部リンパ節転移の状況, 遠隔転移部位, 遠隔転移確認時期などである。結果: 癌浸潤様式が4C, 4D型などのびまん性に浸潤する症例や, 頸部リンパ節転移を生じた症例が多く, 肺への転移が半年程度で認められた。今後, 分子遺伝学的解析も含めて検討する必要があると思われた。

## 2 口腔扁平上皮癌における両側頸部郭清術施行例の臨床的検討

小野由起子・芳澤 享子 (新潟大学大学院医歯学総合研究科 口腔生命科学専攻顎顔面  
高田 真仁・野村 務 (再建外科学講座組織再建口腔外科)  
小林 正治・鈴木 一郎  
新垣 晋

1985年から2000年までに頸部郭清術を施行した口腔扁平上皮癌症例78例のうち両側郭清術施行例19例(24.4%)について臨床的検討を行った。症例は男性15名, 女性4名, 42~77(平均60.4)歳であった。原発部位は舌6例, 口底5例, 下顎歯肉5例, 上顎歯肉3例で, T分類ではT2: 6例, T3: 3例, T4: 10例であった。施行時期は同時が8例, 異時が11例で, 術式は同時例では根治的郭清(RND)+機能的郭清(FND)3例, RND+部分的郭清(PND)3例, PND+PND2例, 異時例ではRND+RND5例, RND+FND5例, RND+PND1例であった。異時例では2回目の郭清術までの期間は6ヶ月以内が8例, 1年以上が3例であり, また2段階で郭清を施行した症例は3例, 後発転移例は8例であった。病理組織学的に両側に転移が認められた症例は11例, 片側は4例, 両側とも転移が認められなかった症例は4例であった。

## 3 顎・口腔領域における非ホジキンリンパ腫の初発臨床像および病理組織学的検討

高田 正典・田中 彰 (日本歯科大学  
岡田 康男・小野 徹 (新潟歯学部口腔外  
金子 恭士・又賀 泉 (科学第2  
石井 馨・片桐 正隆 (同 病理)  
柴崎 浩一 (同 附属医科病院内科)  
張 高明 (新潟県立がんセン  
ター新潟病院内科)

顎・口腔領域に初発する非ホジキンリンパ腫(NHL)は, 自覚症状に乏しい割に急速に増大し, 臨床所見も多岐にわたることが特徴である。上皮系悪性腫瘍に比して痛みに乏しく, 広範囲なびまん性の腫脹を呈することが多く, 歯性炎症や歯周組織炎などの臨床診断にて処置後, 紹介来院するケースも少なくなく, 受診するまでに長期間を要することもある。また初診時の臨床所見, 諸検査から診断, 治療に至る経緯が, 本症の予後を大きく左右することが考えられる。

今回1990年以降に経験したNHL11例について, その初発臨床像および病理組織学的検討を行ったので報告する。11例の概要は, LSG分類で検討するとDiffuse large cell typeが9例で最も多く, 原発部位別頻度は上顎歯肉, 下顎歯肉, 頸部, 上顎洞, 上顎, 頬部の順であった。

## 4 マイクロアレイを用いた遺伝子発現解析に基づく口腔扁平上皮癌の病態と予後因子に関する検討

永田 昌毅・藤田 一 (新潟大学大学院  
星名 秀行・井上 達夫 (医歯学総合研究科  
関 雪絵・高木 律男 (顎顔面口腔外科)  
新垣 晋 (同 組織再建口腔外科)  
依田 浩子・朔 敬 (同 口腔病理)  
大西 真・大山登喜男 (長岡赤十字病院  
歯科口腔外科)

口腔扁平上皮癌(OSCC)の病態把握を目的に, cDNA マイクロアレイを用いた遺伝子発現解析を行った。対象と方法: 新潟大学歯学部附属病院ならびに長岡赤十字病院で治療を行ったOSCCの切除組織, および対照として正常口腔粘膜のmRNAを検体とした。これらについて, 癌関連遺